

の性質は、時折、人間が、そうした状況におかれ、それに耐えてきたものと、まったく異なったものではない。それは、無の経験というような、実質的なものではないのである。

死も、そのつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだろうか。ふつうの別れのときには、人間は、いろいろと準備をする。心の準備をしているから、別れの悲しみに耐えてゆかれる。もっと本格的な別れである死の場合に、かえって、人間は、あまり準備をしていないのではないか。それは、なるべく死なないもののように考えようとするからである。ふつうの別れでも、準備をしなければ耐えられないのに、まして死のような大きな別れは、準備しないで耐えられるわけではない。では、思いきって準備したらどうであろうか。

そのためには、今の生活は、また、明日も明後日もできるのだと考えずに、楽しんで芝居を見るときも、碁を打つときも、研究をするときも、仕事をするときも、ことによると、今が最後かもしれないという心がまえを、始終もっているようにすることである。そして、それが、だんだん積み重ねられてくると心に準備ができてくるはずである。その心の準備が十分できれば、死がやってきても、ふっつりと執着なく切れてゆくことができるのではないか。

(岸本英夫 『死を見つめる』)